

## ＜書 評＞

岩倉博光（帝京大学）監 訳

### リハビリテーション基本手技

足立徹也（横浜市立大学）

我が国においても近年リハビリテーション医療の進歩はめざましい。しかしリハ専門スタッフのいない病院も多い。そのような場合、本来リハ専門スタッフに要求される治療計画をナースが行わなければならないことも多い。この事は米国においても同様らしい。本書はヒューストンのローズウッド総合病院とベイラー医科大学においてリハビリテーションナーシングの向上のためのマニュアルをもとに作られた。

本書は10章よりなり、主として片まひ、脊損、パーキンソン症候群、関節炎について、病態生理、理学療法、心理、ADL、車椅子、排せつ、褥創の問題にわたって述べている。

本書では各章の冒頭に学習目標が示され、更に要所ごとにテスト問題があり、読者の理解の助けとなっている。最も多くのページがさかれている第2章（段階的運動増進法）では、ベッド上動作、歩行前訓練、歩行訓練について豊富な図、会話調の文体などの工夫がなされ、極めて親しみやすく、わかりやすいものになっている。また脈拍チェックの細かな注意、身体力学を強調した訓練や介助手技の説明など、読者が内容を理解しながら身につけられるように書かれている。このような本書の長所の陰には訳者の御苦勞があったものと容易に想像されるところである。平易であり、かつ無味乾燥に陥

っていない名訳といえよう。

リハチームのあるなしにかかわらずナースの側からのリハ看護を学びたいという要求はふえてきており、我々リハ医が講師役を求められることも多い。しかしその場合でも限られた時間で多くを語ることはできず、是非良いテキストが欲しかったところである。従来のテキストには総じて無味乾燥で教科書的なものが多く、辞書がわりに使われる傾向であった。その点本書は苦勞なく、興味をもちつづけながら通読できるという点で格好のテキストとして、ぜひ使ってみたいものである。

以上のごとく本書は平易ながらも内容的にすぐれたものであり、ナースのみでなく、リハ医療に携わる全てのスタッフにとって一読の価値があるものとおもう。

（B 5，頁 236，図 199，写真 72，1984，¥ 4,200 医学書院 刊）